

通算二年のオレゴン生活を振り返って

通算二年

筆者は、一九九四年六月～一九九五年六月、二〇〇八年八月～二〇〇九年二月、二〇一一年八月～二〇一二年二月と通算二年間オレゴン州ポートランド市南の郊外に滞在した。後半の通算一年間については、本誌に毎月時々の話題を連載させていただいた。

これまで二回連載、特に二〇一一年九月号からは各月にそれぞれテーマを設定してオレゴン州の様子を紹介してきた。今回は、それらの中で触れなかった日常生活面のことやテーマ設定からもれた話題を「番外編」としてまとめた。

あなどれないポートランド市

ポートランド市は札幌市との姉妹都市提携が五〇年を超える市である。姉妹提携当時は、札幌市も人口はポートランド市と変わらなかったが、その後札幌市の人口（や面積）が増えて、札幌市とポートランド市とは規模や格が違うという意識が見られる場合がある。

しかし、オレゴン州では、日本のような大規模

な市の合併を行うことはほとんどない。周辺の郊外地域の人口が増え、都市的設備が必要になってくると、その地域はインコーポレイト（市として独立）する。アメリカの統計では、「大都市圏」として、ロサンゼルス都市圏、ポートランド都市圏など、中心市周辺自治体も含めたとらえ方をする。札幌周辺に当てはめるなら、小樽市も江別市も恵庭市や千歳市も札幌都市圏として統計上処理されることがある。その点から見ると、ポートランド都市圏は札幌都市圏にほぼ匹敵すると考えて問題ない。

また、ポートランド市の人口は、マリナーズやスターバックスなどで有名なオレゴン州北隣のワシントン州シアトル市よりもわずかに多い。二〇一〇年の国勢調査によれば、ポートランド市の人口は、五八万三七七六人であり、一方シアトル市は五六万三三七四人である。ポートランド市の方が二万人ほど人口が多い。ポートランド市の面積は三五七平方km（山を含む）、シアトル市の面積は二三五平方km（水面を含む）であり、面積でもシアトル市よりポートランド市の方が広い。

以下では、ポートランド都市圏を総称して「ポートランド」と記載する。特にポートランド市に限定される話題については「ポートランド市」と記

載する。

ポートランドの芸術文化

ポートランドの注目すべきは芸術文化面の充実度である。一八九六年に設立されたアメリカ西海岸で最も古い歴史を持ち、全米でも屈指の交響楽団であるオレゴンシンフォニーは、クラシックの定期公演を同じプログラムで土曜、日曜、月曜連続で演奏するチクルスを月平均二回、その他にイツァーク・パールマン、ルネ・フレミングなど超有名演奏家を招いた公演、青少年向けの公演を行っている。過去には「のためカンタービレ」でも取り上げられたジェームズ・デ・プリーストが長く音楽監督をしていた。彼とのいくつかの録音は、マニアの間では賞賛されるものとなっている。また、二〇一一年には、現在の音楽監督カルロス・カルマーとともにカーネギーホールで演奏を行い好評を博し、それと同一のプログラムを録音したCDは、全米ビルボードチャートのクラシック部門に地方オーケストラとしては珍しく掲載された。

なお、オレゴンシンフォニーのクラリネット首席奏者は日本人で、毎回素晴らしい演奏を聴かせてくれる。二〇一一年シーズンは空席だったフルート首席奏者に一〇〇人を超えるオーディションの末、弱冠二二歳の女性を登用したことも話題となっている。昨シーズンまで岩崎潤（チェリスト岩崎洸の子息）がコンサートマスターで人気を博していたが、二〇一一年シーズンから別のオーケストラに移籍したため、現在首席コンサート

マスターが空席になっているのが少々残念である。オレゴンシンフォニーは、また、ポップス専門の専属指揮者を擁してポップスオーケストラとしても公演を行っている。トランペットのクリス・ボッティ（オレゴン州出身）、由紀さおりをアメリカで紹介していることで有名なピンク・マティーニ（ポートルランドを拠点とする多民族的ジャズグループ）、ハーヴェイ・ハンコック（ピアノ）等有名演奏家との共演のほか、フオントラップファミリ（「サウンドオブミュージック」のもとになったファミリーの孫たちのグループ）との共演、クリスマスコンサート、ヴァレンタインデイコンサートなどでポップスオーケストラの腕前を披露している。

オーケストラのほか、クラシック音楽分野では、ポートルランドオペラも定期的に公演を行っている。二〇一一年〜二〇一二年のシーズンでは、モーツァルト「フィガロの結婚」、プッチーニ「蝶々夫人」などの公演を行っている。オレゴンバレエシアターも、年末恒例の「くるみ割り人形」のほか、ビゼーの作曲で有名な「カルメン」（もとはバレエ音楽として作曲）や、ストラヴィンスキー作曲の「ペトルーシュカ」、アドルフ・アダン作曲の「ジゼル」など意欲的な公演に取り組んでいる。ちなみにオレゴンバレエシアターのプリンシパルには日本人女性もおり、人気を博している。

ポップス音楽分野に目を移すと、毎年二月にはポートルランド・ジャズフェスティバルが行われる。音楽家としては、前述のクリス・ボッティを輩出しているほか、ピンク・マティーニの主催者トーマス・ローダーテールその他が活躍している。また、

さまざまなジャズやポップスグループがホールやバーで演奏している。筆者はボピュラー音楽分野には疎いので、詳細を紹介することはできないが、ミニコミ誌や新聞などを見る限り、この分野でもポートルランド音楽界の水準は高い。在外研修先のポートルランド州立大学には音楽学部もあり、クラシック音楽のほか、ジャズ分野の教員もおり、教員たちの無料コンサートが教会で定期的に行われている。音楽分野以外の舞台芸術では、児童文学作品など子ども向けの演劇を専門とする「オレゴン子ども劇場」(Oregon Children's Theatre)、ミュージカ



アーレン・シュニツァー・ホールの内部

ルの「ブロードウェイ・ポートルランド」、人形劇の「喜びの涙劇場」(Tears of Joy Theatre)、「ボディヴォックス現代舞踊団」(BodyVox Contemporary Dance Company) や「ホワイトバード」(White Bird) などの現代バレエ、各種演劇団体が定期的に公演を行っている。

これらの公演は、アーレン・シュニツァーホール（二七七六席の音楽公演専門ホール）、ケラー・オーデトリウム（二九二九席のバレエやオペラ公演用ホール）、ニューマーク・シアター（八八〇席のこども劇場など演劇やジャズ公演用ホール）など、三つの建物の五つ（アントワネッ



ケラー・オーデトリウム

ト・ハットフィールド・ホールにはニューマーク・シアターのほか二つの小ホールがある³⁾の公立文化ホールのほか、ポートランド市内の各種ホールなどで行われている。

五つの公立文化ホールは、ポートランド市の所有で、管理は、一九九〇年以降、メトロ（広域自治体）の「博覧・余暇委員会」(Metropolitan Exposition-Recreation Commission)が行っている⁴⁾。この委員会は、メトロが任命した任期四年の七人の委員で構成されている。具体的運営は、「ポートランド舞台芸術センター財団」(Portland Center for the Performing Arts Foundation: PCPA) という非営利団体が一括して行っている。

さらに注目すべきは、これらの芸術分野で次世代を育てる努力もなされており、後進の指導にも余念がないことである。クラシック音楽では、「ポートランドユースフィルハーモニック」(The Portland Youth Philharmonic) がプロを目指す一〇代の音楽家たちによって構成され意欲的な公演を行っているほか、「ポートランド・バレエ」、「オレゴン子ども劇場」などがそれぞれ若手育成のプログラムを運営している。これらの運営資金の多くは、企業や市民の寄付によるところが多いが、市やカウンティもそれなりの資金供出を行っている。絵画・彫刻などの芸術分野については、筆者はまったくと言って良いほど見ることはないし、見識もないが、ポートランド市内のあちらこちらにさまざまなモニュメントがある。もつとも有名なのは「ポートランドディア」と呼ばれる、銅像としては全米で自由の女神の次に大きいとされる女性像である。これらのことから見ても、また美術館

や歴史博物館がそれなりの威容を誇っていることから見ても、おそらくは水準は高いものと思われる。

アパート

わが大学の制度では、六カ月間の滞在では経費をすべて負担してくれるわけではないので、相当な持ち出しになる。今回は、大学の旅費計算上の経費（航空運賃は安売り航空券の実費で計算）の半額以下のみ滞在費給付を受けた。したがって、けちけち生活をせざるを得ない。



ポートランドディア

けちけち生活の第一は、アパート代をけちることから始まる。オレゴン州でも、不況により一戸建て住宅ローンの破産が多く、不動産市況は低迷が続いている。このため、アパートの賃貸料も低下しているかという点、実はその逆である。戸建て住宅に夢を託した人びとが不況により住宅を手放し、結局アパート入居に戻らざるを得ないため、需要と供給の関係からアパートの賃貸料は下がるどころか、貸し手相場とも言える状態である。われわれの借りたアパートは、いったい築何年なんだろうと思うような古いアパートである。家賃もしたがって、近隣のアパートの家賃相場より



ポートランド市内歩道の彫刻

は安い。しかし、ベッドルームが二つと台所、居間、バスルームと、外にパティオのついたアメリカの標準的な二ベッドルームと言われる部屋は入居者が変わるとに壁を塗り替えているのか、内部は白い壁でそれほどみずばらしい感じはしないし、六カ月という短期間三人で住むには十分な広さがある。

われわれは小学生の子ども一人と夫婦の三人なので、ベッドルームは一つあれば十分と考えていたのだが、法の規制により、ベッドルーム一つあたり二人までしか貸せないというのである。これは、二〇〇八年にあちこちのアパートを見て歩いたとき一様に管理人から言われている。三人だと二ベッドルームの部屋を借りざるを得ないのである。長期滞在ならともかく、六カ月の短期滞在ではなるべく帰国時の荷物は増やさないように暮らす。広々とした暮らしに慣れると、帰国後のわが住環境の悪さをひとしお感じるようになる。

一九九四年に最初にポートランドに来て一年滞在した時は、今回よりもさらにポートランドから離れたトゥオラタン (Tualatin) 市の郊外の立派なアパートを紹介され、一目で気に入るそこに一年間滞在した。ほとんど大規模団地のようなアパートで、敷地内に屋外とは言え、プールが二つもあり、部屋には薪をたける暖炉もついている、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフを満喫した。二〇〇八年に来たときにも一応そのアパートも見に行ってみたが、建物はそのままなのに、賃貸料は一・六倍ほどになっていた。また、ポートルاند市内や小学校が遠いため、いち早く検討対象から外した。



アパートの外観

二〇〇八年と今回は、同じアパートに滞在したが、二〇〇八年にこのアパートを見つけたきっかけは、スーパーなどに無料でおいてあるアパート情報誌である。その中でも安いところに行くつか目星をつけ、書いてある住所を頼りに現地に行ってみて、周辺の環境、アパートの雰囲気、そして最も気になるお値段を見て決めた。このアパートは情報誌を見た段階では第一の候補であったが、最初に来たときは外見の古さに管理人に会いもしないで退散し、別のいくつかのアパートを見に行った。しかし、いずれも帯に短したすきに長し、外見の良いアパートはもちろん家賃も高く、



アパートのキッチン。流しのところには必ず窓があるのがアメリカ仕様。

さらに最低居住月数を一〇カ月以上に設定しているなど条件が合わず、安いアパートは周辺環境もアパート内の雰囲気も悪かったので、結局書類審査で一番だったこのアパートに舞い戻り、管理人と会い入居を決めた。

子ども連れだと、学校教育の水準も気になるところである。本誌二月号で触れたように、ポートルاند市内の教育水準は平均すると低く、ポートルاند市南の郊外地域が比較的教育水準が高い。ただし、公立学校の教育水準が高いところは、不動産価格やアパート家賃も高くなるので、このバランスをとるのが存外難しい。



家庭のゴミを収集するゴミ収集車。ゴミポッドを自動で持ち上げる。運転手は通常車を降りない。

二〇〇九年にこのアパートを出る際には、意外にも管理人や何人かの住民に「もういなくなるの。寂しい。またアメリカに来るときには絶対またここに来てね。」と言われたのだが、その時は、表だつては言わなかったが、もう来ないのは確実と思っていた。しかし、人生はわからない。今回は、面倒なので部屋が空いていたら同じところにしようと考え、渡米前の八月にインターネットで検索したところ、九月初めに部屋が空くという情報を見つけ、直ちに管理人にメールを書き、アメリカ到着前に入居することを決めたので、アパート探しの面倒はなかった。とはいえ、アパート入居は、

ポートランドに来てから二週間後になってしまった。

このアパートには、見るところ、二〇〇八年に来たときすでに住んでいた中国系男性とわずかの白人、黒人が住んでいるほかは、ラティーノ（南米出身ないし南米出身者を祖先とするスペイン語を話す住民）が入居者の大多数を占める。ラティーノ系住民が年を追うごとに増加している全国的傾向が反映されているようである。

このアパートの古さのためなのかどうかは不明だが、電気の差し込み口のいい加減さには注意が必要である。掃除機など同じ電気器具のプラグを差し込んでもきちんと取まる差し込み口と、きちんと取まらずにくたくたしてすぐに抜ける差し込み口があるのである。もともと電気器具のプラグの方もいい加減で、ある電気器具のプラグがきちんと取まったからといって、その差し込み口に別の電気器具のプラグがきちんと取まるとは限らない。われわれ夫婦のようなかなりいい加減な性格の人間でなければとても耐えられないと思われる。もつとも、うっかり火災や感電を引き起こさないようかなり神経を使った。

アパート全体では六〇以上の部屋があるが、部屋の中には洗濯機・乾燥機はなく、共同の洗濯機・乾燥機置き場が三方所ほどにあるだけである。

コインランドリー

前述のように、安いアパートには室内に洗濯設備はない。したがって、アパート内に何方所か置かれているコインランドリーを使うことになる。



ずらりと並んだコインランドリーの洗濯機

洗濯は、アパートでも可能であるが、われわれはもっぱら車で五分ほどの近くのコインランドリーを使った。理由は、けちけち生活のためである。つまり、アパートの共同洗濯機より安かったからである。

そのコインランドリーの最大のメリットは、火曜日・水曜日・木曜日の週三日間は乾燥機使用料が無料になることである。さすがに洗濯すべてをこれらの日に行うわけにはいかないので、乾燥機が有料の曜日に一回、無料の曜日に一回の洗濯をしていた。乾燥機が有料の曜日はお客さんは少ない。しかし、無料の曜日は、多くの人と大量の洗



こちらはコインランドリーの乾燥機

濯物でござた返す。
 このコインランドリー、たまに白人や東洋系の人を見かけるものの、もちろん日本人には一度もあつたことがない。ほとんどがラティーノの人たちである。したがって、この中の共通語はスペイン語。残念ながらスペイン語は全くわからないので、何を話しているのかは不明だったが、ある意味異国情緒たっぷりと言えた。特に話すことはないものの、次第に見たことのある顔が増えてくる。たまに曜日を違えて行つてもいつも見る人がいたりする。混雑していても、特に順番を乱すことなく、整然と譲り合いながら洗濯が進んでいく。



火・水・木は乾燥機無料を宣伝するコインランドリー

集まっている人たちの見た目からの想定はみごとに覆され、わが身の了見の狭さに恥じ入つたものである。

このラティーノの人たちはほとんどいつも大量の洗濯物を車に積んでやつてくる。いったいどこからその洗濯物が出てくるのか不思議であつた。一般に子どもさんなので、子どもたちの衣類が多い。大量の洗濯をし、乾燥機にかけて、テーブルの上で綺麗に服をたたんでボックスや袋に入れて帰って行く。几帳面だなあと感心する。

コインランドリーに限らず、こちらの自動販売機のはほとんどはクォーターと言われる二五セント

硬貨しか使えない。一度の洗濯がドル二五セントの洗濯機にはコインを五個人入れなければならぬ。大きい洗濯機だと七ドル五〇セントというものもあつた。さすがに、三人分を週二回の洗濯ですまそうとすると、三台の洗濯機を普通は使つていた。そうすると一五個のクォーターがなくなる。さらに乾燥機もとなると、両替が大変である。両替機がランドリーにはあるというものの、一二月末までは新しいタイプの五ドル札は受け付けられないなどいい加減であつた。その後両替機が入れ替えられて新しいタイプでも両替できるようになつた。また、一ドル札は盛んに使われてしまうので、ぼろぼろのもの（日本のお札のように丈夫ではない）がほとんどで、両替機が反応しないこともしばしばであつた。銀行で両替してもらつても可能ではあるが、面倒である。この両替機で二〇ドル札を両替すると二五セント硬貨が八〇個出てくる。さながら、スロットマシンで大当たりするような気分である。

ずらりと並んだ乾燥機の中のある一台だけは、通常二五セントで七分のところ、硬貨一枚でなぜか三〇分乾燥してくれるものがあつた。見つけたのは偶然であるが、乾燥機が有料の時は一台はその乾燥機を使ったことは言うまでもない。しかし、壊れている乾燥機もあるから気をつけなければならぬ。回るだけで暖かくならないものがある。こちらが得するいい加減さは歓迎だが、損するいい加減さは願ひ下げである。全体としてみればバランスがとれていると言えるのかもしれない。二五セントで三〇分の乾燥機は一二月末には修理されて、他と同じ、二五セントあたり七分になつ

てしまった。

ホテル

滞在の最初と最後、それと何回かの小旅行ではホテルを使うことになるが、ホテルに関しては家族で旅行する場合、日本とは比較にならないほど安上がりである。おそらく日本ではもともとは広い部屋に何人かの客を泊めるといふ旅館方式の商慣習が継続し、一人一泊何円と計算するのだろう。いわゆる大部屋方式である。アメリカのホテルは土地の広さを反映してホテル代が安いというだけでなく、個室方式を反映して、一部屋何ドルという計算になる。

標準的なホテルの一部屋は、クイーンサイズベッドが二つとバス・トイレというものである。ワンベッドルームもあるが、その場合たいていはキングサイズベッドが一つである。二ベッドの部屋なら通常四人まで泊まれる。もちろんホテルの格や設備、立地条件、季節その他により部屋代は千差万別である。しかし、一人で泊まっても、四人で泊まっても同じ値段である。一人で旅行する場合には、ホテルの値段は日本と変わらないか、最近の日本のビジネスホテルと比べるとむしろ割高である。

これが家族で旅行するとなると、まさに部屋代が一人あたりでは三分の一、四分の一になる。われわれは金もないので一泊一〇〇ドル以上もするような立派なホテルには通常泊まらない。オレゴン州内を見て歩くような場合、一室七〇ドル台のホテルを選ぶ。それでも部屋の広さはもちろんの

こと、日本の地方都市の中流ホテルと比べると綺麗さにおいても勝っている。われわれがホテルを選ぶ基準は、値段の他には、朝食が無料で提供されるかどうか、屋内プールがあるかどうかである。夏場なら屋外プールでも問題ない。家族三、四人で一泊七〇〇円程度、朝食・プール付きのアメリカのホテルに慣れてしまうと、日本ではとても家族で旅行する気持ちにはならない。いつそのこと海外に行こうとなる。

日本のホテルや旅館の値段を高くしておかざるを得ない理由は、土地の狭さの他に食事を提供する設備、つまりレストランを併設しなければならぬという規制にある。客数の季節変動などにかかわらず、厨房スタッフ、食堂スタッフを抱えておかなければならないのは相当なコスト高になる。アメリカでもレストランがついているホテルは一般に割高である。日本の場合、グルメ旅行をするつもりが、宿泊すると旅館のお着せ料理がセットになっているというのは、客にも優しくない。

アメリカの場合、多くはホテルがいくつか並んでいて、それぞれの近くにファミリーレストランなどの飲食店があるところが多い。レストラン付きの高級ホテルももちろん必要であろうが、日本でもこぎれいで家族が安く宿泊でき、食事はその街の飲食店を散策できるようなホテルを選択できるようにしてほしい。

アメリカのホテルの価格の差は、観察してみると人的サービスの差であるように見える。あるとき事情があつてアメリカでも高級ホテルに宿泊したことがあるが、部屋の設備や仕様などは普段泊

まるようなホテルと違わなかつた。違うのは、ホテルに入った瞬間からの人的サービスである。「荷物持ちます」「お部屋に案内します」「何か必要なことがあればすぐ連絡下さい」等々丁寧に至れり尽くせりである。しかし、貧乏暮らしに慣れた身には、とても他人様に自分の荷物を持たせるなどという芸当はできない。丁寧なサービスがかえつて居心地の悪さを生んでしまう。それに何か尋ねたいことや頼み事があるとしても、いちいち英語で対応するのは面倒である。できるだけ必要最低限の英語しか使わないようにするには、何かとつこく話しかけてくるサービスは、これまたかえつて邪魔くさい。高い金を払って居心地の悪い思いをするのは、実にばからしいので、一泊一部屋一〇〇ドル以上のホテルはよほどの事情がない限り願ひ下げである。一部屋と言つても、家族四人までなら通常大丈夫で、部屋を選べば子どもを含めて六人程度まででも一部屋で済みますこともできる。

考えてみると、日本の旅館を好きになれないのは、やはりこうした人的サービスが充実しているためなのかもしれない。「宿泊」は宿泊でしかない。それ以外の食事遊興娯楽をしたければ、それ専門の店を使うのが合理的だと思う。日本の旅館システムは時代遅れになっているように思える。

こうした安ホテルの朝食は、ホテルによつても若干異なるが、多くは、パン(各種)、ワッフル(ワッフルメイカーで自分で作る)、サラダ、各種ジュース、コーヒー・紅茶、果物、卵料理、ヨーグルトなどなど、日本のビジネスホテルの洋食朝食よりも豪華にできる。

ホテルを使う場合に忘れてはならないのは、税金である。これが各自治体ごとに異なる。ホテルから営業税を取るのはもちろんとして、客もその自治体の水道・下水道・道路など税金によって維持されている政府資産を使うことになるのだからその分の負担を求められるというのは、考えようによっては理にかなっている。その負担が日本各地で水道代や電気代が異なるように自治体ごとに違っている、〈自治〉という側面からはむしろ適切だということになる。さりげなくアメリカの〈自治〉を体験するには、宿泊したホテルの請求書の税金欄を見比べてみるとよい。

食事の#1010

アメリカで暮らす上で最も問題なのは食事である。どちらかと言えば、美味しい食事を求めるという趣味はなく、生きるためには仕方なく食べるしかないという筆者からみても、レストランなどの料理の単調な味付けと量の多さには辟易する。

もちろん、思いがけず美味しいレストランに出会うこともある。一般に韓国、ベトナム、タイ、中華などのアジア系レストランでは美味しい料理に出会える。いわゆる洋食系は、残念ながらうまくと思えるレストランに当たる確率は低い。特にアメリカ人にどこの洋食レストランが美味しいか聞いてから行つたらためである。一般に味覚が違ふ。ステーキにしても、ある程度の高級そうなレストランで数十ドル支払つても、その辺のスーパーでステーキ用の牛肉（ちよつと高い）を買つてきて適当に味付けして作るものより美味しくは

ない。なぜ料理してわざわざますぐするのか疑問である。昔、ヨーロッパの人たちがアメリカ人をさして、「あの連中はホットドッグ一つで朝から晩まで働く」と揶揄した（おそらくは働きのアメリカ人に嫉妬してのことであろう）という話を当たつていと思われ。

しかし、これは公平に言えば、食習慣の違い、何を美味しいと感じるかという味覚の違いを言っているだけで、彼らから見れば日本人の食べるものこそまずいということになるかもしれない。

とはいえ、最近ではアジア系の食材や料理が人気である。日系人が創設した日本製品をたくさんおいてあるスーパーにもアジア系以外の買い物客が多くなっている。また、韓国系のスーパーでもアジア系以外の買い物客をそれなりに見かける。「寿司」や「弁当」（もう Bento は英語）の人氣が高いの言うまでも無い。単に栄養を摂取すればそれでよいという合理主義から、美味しくなければ食事ではないという耽美主義に変化しつつあるように思われる。こうしたアジア系料理は、ポートランド市内の公園などのスペースに所狭しと並んだ屋台（トラックのトレーラーを改造したもの）でも人気である。お昼時はビジネス客などでこれらの屋台付近はごった返す。

われわれは日本食レストランにはほとんど行かなかつた。安上がりで美味しい札幌・北海道の食堂やレストランに慣れた身には、国内でさえ美味と思わせる食堂に出会うのは道外ではまれであり、いわんやアメリカにおいては、いくつかの店に行つてはみるものの、まあ頭にくるから行かな

いことにした。あれが日本の料理だと思われるのは困つたものだと思うことがしばしばであった。現地の人たちの味覚に合わせているほか、食材の違いもあるのだろう。

また、アジア系以外のスーパーにある食材に関しては、野菜、肉、果物、ジュースなど、種類も豊富で値段も安く、自分で料理をするなら日本にいるより安上がりで美味しい料理ができそうである。特に果物ジュースは、まずほとんど濃縮還元日本のジュースとは比べものにならないほど安く美味しい。アメリカなどで濃縮還元してないオレンジジュースを飲んでその味を知つてしまうと、日本のオレンジジュースはまずくて飲めない。日本より遙かに美味しいものもあるのである。しかし、洋食系レストランであそこのステーキならもう一度食べてみたいと思うのは、通算二年間以上にわたるアメリカ滞在で、とある田舎町の軒のレストランしかない。もつとも途中から洋食系レストランには行かなくなつたので、他にもあるのかもしれない。

少々感覚を鋭くすれば、スーパーで売っている食材の安さと、レストランやちよつとした立ち食いや屋台の食事の値段の高さにギャップを感じるはずである。その本当の理由がどこにあるのかは定かではない。ただし、一定の推測はできる。人件費の高さである。最低賃金がきつちりと決まつていて、経営者側はそれに違反しようものならきつちりと代償を払わされる。単に未払い分プラス利息を清算すれば良いというものではない。懲罰的損害賠償の求められる国である。労働組合（union）もしつかりしている。経営者は、へたを

すると刑事事件として処理され、刑務所行きも覚悟しなければならぬ。そんなリスクを考えると、人件費の高さは価格に転嫁するのがもつとも合理的なことになる。

しかし、一回に提供される料理の量は、どう考えても多すぎる。たくさんのお食事を一気に食べられる人にとっては、アメリカのレストランの値段は決して高くないということになる。筆者は、量は半分でいいから値段はあと二割程度下げてくれたら安心できると思うことがほとんどであった。

カナダから大挙する中国系

ポートランド市から南に車で三〇分ほどのウッドバーン市には、比較的大きなアウトレットモールがあり、ポートランド周辺から多くの人たちが安いブランド品を求めて集まってくる。われわれも衣料品の多くはこのアウトレットモールで調達した。

このアウトレットモールで、今回は、これまで経験したことのない現象があり、最初は大きな疑問だった。それは、コーチやナイキなど有名ブランドメーカーの店に中国人と思われる人たちが異常に多いことである。もちろん、中国語で話しているし、われわれがこれらの店に入ろうものなら、店員が中国語で話しかけてくるという状態であった。コーチの店では、一人がたぐさんの、それほど安くもないバッグを手持ってレジに並び、レジはいつも大混雑である。中国の景気回復が著しく、昔日本人がしていたようなブランドあさりをしていのかと最初は思っていた。

ところが、年末の新聞報道によれば、これらの中国語を話す人びとはなんとカナダからバスを連ねて団体で買い物に来ている中国系カナダ人たちであるとのことである。カナダは消費税が導入されており、同じものを買おうとすると売値が高いほかに税金もかかるので、ウッドバーンで買うとカナダの六割程度の値段で買えるというのであ



ウッドバーン・アウトレットモール



車を感知し信号を操作するアンテナが埋め込まれた道路

る。

そのため、オレゴン州への買い物ツアーが旅行社によって生まれ、ウッドバーンのアウトレットのほか、ポートランド周辺の若干の観光地を巡る二泊三日程度のツアーが中国系カナダ人に大人気なのだそうである。おそらくは、観光は付け足しで、多くの時間は買い物に費やされるのであろう。カナダの隣のワシントン州を通り越して、オレゴン州にくるのは、オレゴン州には州にも市にも消費税（付加価値税）がないからである。値札通りの買い物ができるのはわかりやすく良い。マクドナルドなど全国的に同じ値段で売られていて

も、ワシントン州やカリフォルニア州では、その価格に税金がプラスされる。しかし、オレゴン州ではそれがないので、マクドナルドのハンバーガーが全米で一番安く食べられるということになる。

消費税がないのどうやって州政府や市政府の財源を調達しているのか疑問に思う向きもある。オレゴン州はロタリー、いわゆる「宝くじ」を発行しており、その収益が税外収入として、教育、経済開発、公園・自然環境保全に配分されている。このロタリーは不況の影響をあまり受けないようで、もちろん州財政は不況で厳しいのであるが、このロタリー収入がある分しのげていると言える。

銀行自動預払機の使い方

アメリカと日本との違いは、「信用」に見られると言つて良いかもしれない。アメリカは信用社会である。普段の買い物にしても現金が使われることは少なく、かつては「パーソナルチェック」(個人小切手)による支払いがほとんどであり、それが現在は一応デビットカードやクレジットカードに置き換わっている。

近年では、コンビニに置かれていた現金自動預払機を使って日本にも進出しているアメリカ系の銀行口座から現金を簡単に引き出せるし、クレジットカードも使えるので、現地で銀行口座を作る必要はほとんどない。しかし、アパート家賃の支払い一つだけはどうしてもパーソナルチェックを使わざるを得ず、仕方なく銀行口座を作らざるを得なかった。

一九九四年に来た頃は、デビットカードはまだなく、パーソナルチェックが主であった。パーソナルチェックの作成で筆者がもつとも苦労したのは、支払いの際に数字とともに書き入れなければならない金額の文字であった。中学生レベルの英語ではあるが、例えば九八ドルはどんな綴りだったかと思案することしばしば、あとから間違つたこと気づくこともあった。

銀行口座を作つたら家賃支払いのために一定の現金を預け入れる必要がある。窓口で手続きする方法もあるが、ドライヴスルーなどで自動預払機を使うときには若干の注意が必要である。現金引き出しは問題ないが、預け入れが日本とはかなり異なる方法になる。

日本と異なり、パーソナルチェックやバンクカードを自動預払機で処理できるためもあるが、現金を預け入れる場合も、カードを入れて暗証番号を打ち込み、預け入れる金額をボタンで打ち込んだあと、自動預払機に備え付けの封筒に現金を入れ、封入金額と自分の名前を書いて所定のスロットに差し込まなければならない。当然ながら、この時封入された現金を機械が数え上げることはない。機械に打ち込んだり、封筒に書き込まれたりした封入金額と銀行側が受け付ける際の金額がずれていたらどうするのだろうかと思議だった。

機械に吸い込まれた封筒は、一定時刻に銀行員がわざわざ機械を開けて回収し、金額を照合して正式な入金となる。したがって、自動預払機に預けたあとしばらくは預けた金額を引き出すことはできない。日本の現金自動預払機に慣れた身には、

なんとも中途半端な仕組みに感じる。おそらくは、日本のように現金だけでなく、取り立ての必要な小切手類も処理しなければならないところからきている仕組みであろう。

健康診断でポータス

アメリカでは、労働組合 (union) が強い力を持つていることは日本ではあまり知られていないように思う。稼働時間の厳守などの雇用者保護や労働条件の改善に労働組合は大きな力を発揮している。公務員の場合も組合の力は大きい。筆者は、アメリカの新自由主義的側面ばかりが紹介されて、アメリカの労働組合の強さがほとんど紹介されているように見えないのは不公平に思うし、日本も少なくともアメリカ並みに労働組合を強くすべきだと考えている。以下では、見ようによっては組合の強さのマイナス面のようにも受け取られかねないが、組合の強さとも言える一例を紹介する。

ポートランド市警察官は、健康診断を受けると1%のポータスが支給されることになった。組合との合意で、コレステロール、血圧、体重身長比(BMI)など、簡単な健康チェックを受け、問題がなければ1% (年取平均七三九ドル) のポータスを受けられる。警察官の健康管理を促すためとされている。もちろん、これらの数値が変化しないことと、日常業務を遂行する体力があるかどうかとは明らかに異なる。

組合と合意しようとしたもとの内容は、きちんとした体力試験を行つて、高水準の身体能

力、すなわち、警察業務遂行能力があると認められた場合にポーナスを出すというものであったらしい。しかし、市の人事管理者によると、きちんとした体力試験をする財源がないので、とりあえず血液検査などの結果でポーナスを支給することにしたとのことである。当然『オレゴンアン』紙は、結局九一%もの警察官に支給される一%ポーナスは、警察官の業務遂行能力の向上を促す奨励給ではなく、税金の無駄遣いだと指摘している。

こうした報道を受けて、ポートランド市議会議員のダン・サルツマン (Dan Saltzman) は、実質的な体力健康診断がなされるまでは、ポートランド市警察官への健康奨励給の支給を無効にするという決議案を市議会に提出した¹²⁾。しかし、二〇一二年一月一八日の市議会では可決されなかった。サルツマン議員は、市の人事局長にだまされたように感じると述べているという。

とはいえ、この組合との合意は、完全に人事局長の権限に属することだというのが、同じく市議会議員のニック・フィッシュ (Nick Fish) の見解である。また、市法務局 (city attorney's office) も市議会が組合との労働協定の一部を一方的に無効にすることはできないことが明らかだとしている。警察組合 (Portland Police Association) の代表は、次の契約で体力試験導入交渉に反対しないとし、「われわれはきちんとした体力試験を拒否しているわけではない」とコメントしているとのことである。

奨励給支給を組合と合意してはみたものの、いざそれを執行しようとしたら財源がない、あるいは、厳格な体力試験をして奨励給を支給するより

も、ほぼ全員にポーナスを支給する方が安上がりであることが判明したためとられた措置であると思像される。市当局の見込み違いこそ非難されるべきであろう。とはいえ、そうした場合でも、感情よりも勘定を優先する合理主義を貫徹させたのだらうと思考する。筆者には、こうした合理主義は、むしろわかりやすく良いと思われるが、日本の事業評価は、ここまで合理主義に徹することができるとあろうか。

知事の死刑執行停止

今回の滞在中のもう一つの興味深いニュースは、死刑に関するものであった。月間報告のテーマとして独立させることができなかったが、簡単に紹介しておく。

すでに日本でも報道されたように、二〇一一年一月下旬、オレゴン州知事三期目のキッツハーバーは、一月六日に予定されていた死刑執行を中止すると宣言した¹³⁾。その際、自分の任期中は死刑執行しないことも明言した。オレゴン州は、一九八四年に死刑制度が復活してから、一九九六年、九七年と立て続けに二人に死刑執行がなされている。その時の知事は、まさに現在州知事のキッツハーバーだった¹⁴⁾。今回は、死刑制度復活後三例目になるはずだった。キッツハーバー知事は、この五〇年間でオレゴン州知事として死刑執行命令書に署名した唯一の知事であり、死刑執行命令書に署名し生きている唯一のオレゴン州知事経験者でもある。

しかし、今回自分自身人びとの命を救うことを

宣誓した医師でもある州知事は、任期中執行命令書に署名しないことを宣言したのである。知事の言い分は、前回の二人は、知事就任一週目で、しぶしぶ執行書に署名したものの、今回は自身の良心に従って執行命令書に署名しないと断言している。

その理由として知事は、医師としての使命との矛盾のほか、もともと死刑反対論者なのに加えて、オレゴン州の死刑制度に欠陥があることを挙げて¹⁵⁾いる。オレゴン州では、死刑囚が異議申し立てを続けられれば死刑執行が延長される制度となつている。つまり、本人が死刑執行を望まなければ死刑執行がなされないことになる。これは逆に言えば、死刑囚が自分から望んだ場合のみ死刑執行が行われるということである。知事は、ボランティア死刑 (死刑囚が "volunteer" すると死刑になる) と表現し、法制度の欠陥であると指摘している。また、死刑制度は州の財政負担も大きいと指摘している。

最近、ニュージャージー州やニューメキシコ州、イリノイ州が相次いで死刑を廃止していることも知事の判断に影響している可能性がある。オレゴン紙の社説は、もともと死刑反対で死刑執行を任期中に行わないというなら、二〇一〇年の知事選挙で死刑廃止を公約すべきだったとし、死刑執行停止が本当にオレゴン州民の多数の声を反映しているかどうかを知事は示すべきだと非難している¹⁶⁾。

日本との違いは、知事の判断よりも行政官でもある検察官がこうした知事の決断に対して公然と異議を表明していることであろう。知事の死刑執

行停止表明に対し、一二月四日付けの『オレゴンアン』紙に二人のカウンティ検察官（カウンティ内の刑事事件を管轄する検察官）が連名で、知事は州法を守ると宣誓したからには、死刑執行調書に署名すべきだという投書をしている¹⁷⁾。

しかし、「知事が執行調書に署名しなければ死刑執行はできない」制度であるということは、形式的には知事が死刑執行を止められるという制度（法）になっているのであって、州法を守っていないとまでは言えないのではないかと思える。彼らが問題にしたいのは、判決が確定すれば自動的に死刑執行ができるように州法がなっていないことだというのなら理解できる。ただし、行政官が州法の欠陥を問題にするのは民主主義の原則に反するので、州知事の遵法精神を問題にする方向から攻めてきたのだらうと思う。この点に関しては、「本当に州民は死刑廃止を望んでいるのか」という『オレゴンアン』紙の社説の論法の方が知事への批判としては、正鵠を射ていると言えらるだろう。知事の判断をきっかけとしてオレゴン州でも死刑制度について州議会、州民投票で議論が続いていくかもしれない。

【註】

- (1) David Stabler, "Oregon Symphony's CD hits Billboard's classical chart," *The Oregonian, OregonLive.com*, Nov. 30, 2011.
- (2) David Stabler, "Concertmaster Jun Iwasaki leaves Oregon Symphony for Nashville," *The Oregonian, OregonLive.com*, Jun. 01, 2011.
- (3) 一つは、三〇四席の多目的ホールであるドローン・ス・ウィニングスタッド劇場 (Dolores Winningsstad

Theatre) で、もう一つは三五〇〇平方フット(約一〇〇坪弱)の広さのブランチシュネーホール (Brunish Hall) である。

(4) ポートランド都市圏の広域自治体である「メトロ」の概略については、拙稿「アメリカの地方自治と広域連携 ポートランド都市圏メトロを事例に」(北海道自治研究 第四七〇号、二〇〇八年三月)を参照。

(5) 本誌昨年一二月号などで触れたように、オレゴン州の土地利用政策では、市の都市計画の中に含める住宅計画に、住宅の多様性の確保が求められている。すなわち、一戸建て高級住宅だけの都市計画を作成することは禁じられており、一戸建て、アパート(高級から低所得者向け)をバランス良く配置することが求められている。このため、うまく探せば、学校教育水準が比較的高い地域でも安いアパートを見つけることが可能である。ただし、ニューヨークなど超大都市ではホテル価格は当然高い。あくまで普通の都市や普通の観光地での話である。

(6) オレゴンコーストの牧畜なども盛んなある市のレストランでは思いがけず美味しいステーキを味わうことができた。生産地に近い農村部と人件費の高い都市部でおいしさも異なるのかも知れない。

(7) 最近も、あるタイ料理店経営者が、タイからの移民を最低賃金や労働時間制限を超えて雇用していた疑いで摘発されている。Brent Hunsberger, "Typhoon closure spurs fallout: Former executive files for bankruptcy; chefs are told to return to Thailand," *The Oregonian, OregonLive.com*, Feb. 07, 2012, Updated: Feb. 08, 2012.

(8) Laura Gunderson, "Woodburn Company Stores woo Canadian shoppers on Boxing Day," *The Oregonian, OregonLive.com*, Dec. 26, 2011.

(9) 二〇〇九〜二〇一三年度では、ロタリー収入の五九%が大学を含む教育に、二五%が各種企業の雇用創出などの経済開発に、一五%が州立公園(七・五%)と流域資源保全及び鮭回遊(七・五%)に、一%がギャンブル依存症対策に配分される。

配分割合の変更などは、州民投票によって決定される。

(10) 詳細については、Maxine Bernstein, "A no-sweat fitness bonus," *The Oregonian*, Jan. 7, 2012, A1 & A7; Maxine Bernstein, "Cop fitness test 'unacceptable'," *The Oregonian*, Jan. 12, 2012, C3. 参照。また、『オレゴンアン』紙社説「Editorial Board: "From bonus to boondoggle," *The Oregonian*, Jan. 10, 2012, B4.も参照。

(11) Maxine Bernstein, "Police fitness pay panned," *The Oregonian*, Jan. 19, 2012, C1-2.

(12) Helen Jung, "Kitzhaber blocks all executions," *The Oregonian*, Nov. 23, 2011, A1 & A4.

(13) オレゴン州知事の任期は四年。連続しての知事就任は、二期八年まで認められる。また、通算では三期十二年までの就任が認められている。キッツハーバー知事の二期日終了後は同じ民主党から二期同一人物が連続で知事に就任していた。二〇一〇年にキッツハーバーは再度知事選挙に出馬し、当選したため三期目の知事を務めている。

(14) John Kitzhaber, "Time to rethink death penalty," *The Oregonian*, Nov. 23, 2011, B9.

(15) Editorial, "Calling the question on the death penalty," *The Sunday Oregonian*, Dec. 11, B7. その他の論評としては、ルイス&クラーク法科大学院の元院長Arthur B. LaFranceによる「知事の論理の矛盾を指摘するもの」(Arthur B. LaFrance, "Kitzhaber should commute all death sentences," *The Sunday Oregonian*, Nov. 27, 2011, B8.)、知事の判断に同情的と思われ「オレゴンアン」紙副編集長David Sarasohnのコメント (David Sarasohn, "On voluntary execution, Kitzhaber won't sign on," *The Sunday Oregonian*, Nov. 27, 2011, B7.) なども参照。

(16) Eric Nisley and Walt Beglau, "In My Opinion - Respecting the will of voters," *The Sunday Oregonian*, Dec. 4, 2011, B7.

(17) へさこ、かつひろ、北海道大学教授／当研究所理事長